

## 問題行動を示す子どもへの理解のしかたについて —3—

○高階恵子

(台東区立大正小学校)

石岡由紀

(神戸親和女子大学)

### 問題と目的

本研究は、いわゆる問題行動とされる言動をとる子どもがなぜそのような言動をとったのかという「理由」を明らかにした場合とそうでない場合に分け、それぞれについて言動を評価するという高階・石岡(2000)の調査研究を継続して行ったものである。

「窓ぎわのトットちゃん」はLD児であったのではないかとされているが、その彼女の行った言動を事例(学校での言動…事例1/家庭での言動…事例2/地域での言動…事例3)とし、その「理由」のあるなしによって、おとなの理解のしかたにどのような変化が生じるのかということ进行分析・検討する。またその結果から問題行動とその理解のしかたを考察し、問題行動の本質を探ることを本研究の目的とする。

### 方法

#### 1. 調査対象

教員養成大学に在籍する女子大学生302名と保育士52名である。

#### 2. 手続きおよび質問内容

調査は2002年9月から10月にかけて上記対象者に対して行った。また本調査では質問紙法を採用した。その内容は、いわゆる問題行動とされる3事例を提示し、その子どもの言動について、理由がある場合とない場合で評価のしかたに違いが出るか否かということ进行调查するものである。またそのように思った理由は自由記述で回答するものとした。

### 結果

表1は、各事例における理由のない場合の回答を示したものである。事例1は「授業中に机のふたを百ぺんくらい開けたり閉めたりする」というものである。理由が述べられることがなく、この行動のみを提示された場合「とても問題行動だと思う」と答えた者は58名で「問題行動だと思う」と答えた者は201名である。また「あまりそう思わない」と答えた者は89名であり「まったくそう思わない」と答えた者は6名である。

事例2は「洋服の破れたわけを聞かれてウソをつく」というものである。理由が述べられること

がなく、この言動のみを提示された場合「とても問題行動だと思う」と答えた者は39名で、「問題行動だと思う」と答えた者は94名である。また「あまりそう思わない」と答えた者は140名で「まったくそう思わない」と答えた者は81名である。

事例3は「学校から家まで難しいことばをブツブツ言いつづける」というものである。理由が述べられることがなく、この行動のみを提示された場合「とても問題行動だと思う」と答えた者は29名で「問題行動だと思う」と答えた者138名である。また「あまりそう思わない」と答えた者は136名であり「まったくそう思わない」と答えた者は51名である。

表2は、各事例における理由のある場合の回答を示したものである。事例1で理由が述べられた場合「とても問題だと思う」と答えた者は15名で「問題だと思う」と答えた者は106名である。また「あまりそう思わない」と答えた者は136名であり「まったくそう思わない」と答えた者は97名である。

事例2で理由が述べられた場合「とても問題だと思う」と答えた者は6名で「問題だと思う」と答えた者は49名である。また「あまりそう思わない」と答えた者は121名であり「まったくそう思わない」と答えた者は178名である。

事例3で理由が述べられた場合「とても問題だと思う」と答えた者は3名で「問題だと思う」と答えた者は28名である。また「あまりそう思わない」と答えた者は110名であり「まったくそう思わない」と答えた者は213名である。

表3・図3(別紙参照)は事例1において、理由がない場合とある場合の回答の変化を示したものである。理由が述べられることがなく、この行動のみを提示された場合「とても問題行動だと思う」と答えた58名のうち理由が明らかになった場合「とても問題行動だと思う」と答えた者は13名で「問題行動だと思う」と答えた者は27名である。また「あまり問題行動だとは思わない」と答えた者は15名で「まったく問題行動だとは思わない」と答えた者は3名である。次に理由が述べられることがなく、この行動のみを提示された

場合「問題行動だと思う」と答えた 201 名のうち理由が明らかになった場合「とても問題行動だと思う」と答えた者は 2 名で「問題行動だと思う」と答えた者は 77 名である。また「あまり問題行動だとは思わない」と答えた者は 83 名で「まったく問題行動だとは思わない」と答えた者は 39 名である。さらに理由が述べられることがなく、この行動のみを提示された場合「あまり問題行動だとは思わない」と答えた 89 名のうち理由が明らかになった場合「とても問題行動だと思う」と答えた者は 0 名で「問題行動だと思う」と答えた者は 2 名である。また「あまり問題行動だとは思わない」と答えた者は 37 名で「まったく問題行動だとは思わない」と答えた者は 50 名である。そして理由が述べられることがなく、この行動のみを提示された場合「まったく問題行動だとは思わない」と答えた 6 名のうち理由が明らかになった場合「とても問題行動だと思う」「問題行動だと思う」と答えた者はともに 0 名である。また「あまり問題行動だとは思わない」と答えた者は 1 名で「まったく問題行動だとは思わない」と答えた者は 5 名である。

事例 2 の結果は表 4・図 4（別紙参照）また事例 3 の結果は表 5・図 5（別紙参照）に示すとおりである。

#### 考察

以上の結果から 3 つの事例のうち理由が述べられることがなく、言動のみを提示された場合、最も問題行動とされる言動は程度の差はあれ「問題行動である」と答えた者が全対象者の 73.2% を占める「授業中に机のふたを百ぺんくらい開けたり閉めたり」するというものであり、続いて「学校から家まで難しいことばをブツブツ言いつづける」（47.2 %）そして「洋服の破れたわけを聞かれてウソをつく」（37.6 %）となっており、事例 1 以外は半数以下の者が問題行動だとは思っていないことがわかる。これは事例 1 の場合授業中にふたを開け閉めすることにより授業の妨げになることが、問題行動だと思う大きな理由となっているものと考えられる。事例 3 の場合は「問題行動だ

と思う」（47.2 %）と「問題行動だとは思わない」（52.8 %）とほぼその回答は二分されているのであるが、この事例の場合の回答理由として「自分もブツブツいいながら歩くことがある」というものと「一人でブツブツいいながら歩くのは奇妙である」というものに示されるとおり、自分の言動と照らし合わせた時に納得できるか否かということが、その判断材料になっているようである。さらに事例 2 においては「問題行動だと思う」（37.6 %）という回答より「問題行動だとは思わない」（62.4 %）と回答した者が上回るという結果が得られている。これもその回答理由としては「私も叱られるのが嫌な時にウソをついたことがある」というものに示されるように、子どもの言動を理解する時の判断材料の一つには自分の言動との比較という項目が存在しているものと考えられる。

また、理由がない場合と理由がある場合の回答の変化を見ると、少数の意見を除いてほとんどの場合が「問題行動だと思う」割合が減少している。これは、日常生活の中で子ども、特に発達に遅れのみられる子どもがいちいちその言動の理由を述べて行動を起こすということが少ないという現状を鑑みた時に、いかに我々おとなが子どもの言動に誤った見解を持って接していたか、またさらに子どもの言動のみに着目し、その言動の意味を理解したつもりになっていたかということを示す結果であるものと考えられる。

#### 結論

いわゆる LD や ADHD といわれる子どものどの言動の何がどのように問題であるとされるのであろうかという疑問に立ち戻った時、本調査ではその原因は子どもの言動にのみ焦点が当てられるべきではなく、実は彼らの示す言動に遭遇したおとなの理解のしかたにも大きな課題があったのではないかということが示唆された。今後は、保育士・教員と学生の間における子どもへの理解のしかた、また学校・地域・家庭における場面別での理解のしかたなどに違いがあるのか否かについて、詳細な分析を継続していく所存である。

表 1 理由がない場合の評価

	事例 1	事例 2	事例 3
とても問題である	58	39	29
問題である	201	94	138
あまり問題でない	89	140	136
全く問題でない	6	81	51
計	354	354	354

表 2 理由がある場合の評価

	事例 1	事例 2	事例 3
とても問題である	15	6	3
問題である	106	49	28
あまり問題でない	136	121	110
全く問題でない	97	178	213
計	354	354	354